

細田 弘著『山に入る日～山野彷徨から瞑想的登山へ～』

“単独行”と言えば、往時いわゆるセレブの殿様登山が登山界の主流であった時代に、大正末期から昭和初期にかけて単独行で厳冬の北アルプスなどを駆け抜け、弱冠 30 歳で風雪の北鎌尾根に逝った加藤文太郎のことを思い出される方も多いのではなかろうか。孤高の単独行者の草分けであった。

当時の登山界からすれば、加藤文太郎などはどこの馬の骨とも知れない低貧層の一匹狼で、登山という高級な貴族趣味の世界に土足で上がり込んで来たアウトローと映ったことであろう。余談はさておき・・・。

今回紹介するこの本は、腰巻評論に“歳を重ねつつ、さらなる高みを目指す単独登山者の軌跡と思索の数々”とあり、サブタイトルに「山野彷徨から瞑想的登山へ」というからには、きっと加藤文太郎ばりの孤高の単独行のエッセンスの大海原が詰まっているのではないかと期待して買ってみた。

実は、本欄でも同じ著者の最近刊『そのまた向うの山と空』（2020 年発行）を紹介したが、これも“年と病を重ねつつも山に揺蕩う、瞑想的登山の果てに何を感じたのか”という腰巻コピーに騙されて読んでみたのであるが、何となくピンとこなかった。

ところが、その本よりも 7 年も前の発行である本書の方が期待を裏切らなかった。

本書は、次の 3 章建てになっている。冒頭の「独りで歩く山の旅」という章では南アルプスの蝙蝠尾根や仙塩尾根、黒部源流の山々、北八ヶ岳、大峰山奥駈け、奥羽の山々など、単独でノンビリと彷徨い歩いた山旅の様子が淡々と語られている。単独行故の淋しさもあり、荒天時の寂しさもあるが、行動も物思いも全て自分で勝手に決められるので、己の心に思うがままに流されるという贅沢な境地が披露されていて、登山中でも世俗のしがらみに引き摺られている小生には、ホウ、このような世界もあったのかと眼から鱗であった。（しかし、ページを閉じれば元の木阿弥、我が眼はすぐに世俗の鱗に覆われるのが哀しいところである）。

次章は「山で考えたこと」という随想録である。登山という行為や山との付き合い方など、心と体で感じた登山の想いを紡いだ章である。「山旅と登山」という項では登山の本質に触れて、〇〇名山ツアー登山などのいわゆるカタログ登山スタイルの功罪を論じて、真の登山というのは標高の高低や難易度に係らず、既に付けられている登山路を登る行為ではなく、自分でルートを切り拓いて登る登山のことであると書いている。即ち、ガイドに先導されるエベレストは単なる山旅、逆に、標高が低い山でも登山路が無い山にルートを切り拓きつつ（探しつつ）高みへ登る山は登山であるという。即ち、他人や世間の言動に惑わされることなく、自分の心の中の何かが求めるままに登れば良い。そのような登り方をすれば、その折のそれぞれの山行がそれぞれの登山者にとっての山との貴重な一期一会になる・・・と。我が意を得たりと再び目から鱗が落ちてきた。この章が或いは本書の真骨頂でもあろうか。

終章は「幽かなる踏み跡を追って」と題して、劔岳北方稜線、西海谷三山縦走、甲斐の鋸岳などの踏み跡も無いようなルートを還暦を過ぎた身の単独行で辿ったバリエーション・ルートの軌跡が綴られていて、若くもないのによくぞこんなルートを辿ったものと感心させられた。

圧巻はブナグラ谷から劔岳本峰迄の劔岳北方稜線縦走で、這松が覆い被さる断崖絶壁で滑落遭難しそうになりながら何とか此岸に舞い戻った様子が克明に語られていてハラハラドキドキ、興味が尽きない。

白山書房 2013 年刊、1800 円

